

いつでもどこでもだれにとっても「よいもの」は存在するか

—普遍性をめぐる哲学の授業の一風景—

Is There Anything That Is Good for All Time, All Places, and Everybody?: A Scene in a Philosophy Class on Universality

根無一信

Kazunobu NEMU

序¹

アメリカのロックバンドBON JOVIが1995年6月25日にロンドンのウェンブリースタジアムで行ったライブにおけるバラード曲Alwaysは最高に感動的だった。6月23・24・25日に行われたこのライブでは、演奏された曲はほぼ同じであり、Alwaysも三日間すべてにおいて歌われたわけだが、三日目25日のAlwaysこそ最高に感動的であった。初日と二日目のAlwaysはたいして感動的ではないし、さらに言うなら、スタジオ版のAlwaysもたいして感動的ではない。従って、こう言ってよいなら、AlwaysがAlwaysとして感動的なのは、1995年6月25日のライブにおけるAlwaysなのである。

いま、筆者はAlwaysという曲について以上のように書いたのであるが、もちろんこれは25日のあのAlwaysを愛してやまない筆者自身の見解である。従って、当然ながらいま記述した内容には次のような反論が予想される。すなわち、それはあくまであなたの意見であって、必ずしも全員にはあてはまらないのではないか、それゆえ、あなたは「筆者にとって最高に感動的であった」や、「初日と二日目のAlwaysは筆者にとってたいして感動的ではない」などという書き方をしなければならない、と。要するに、冒頭に記した筆者の意見はあくまで主観的な感想であって、25日のAlwaysが「最高に感動

的」だと考えない人もいるのではないかというわけである。

このような疑念をより一般的に表現すれば、或る人にとっての「感動的な歌」が別の人にとっては「数ある駄曲の一つ」かもしれない可能性は決して排除されえないのではないか、ということにでもなろうか。さらに、最も一般的な言い方をするなら、「価値というものは相対的なのではないか」という表現に落着するだろう。問いをひとたびこのように立ててしまえば、この問いに対して「然り」と応答することはごく基本的な態度であるように思われ、それゆえ、「最高に感動的」かどうかは主観に基づく相対的な判断でしかないという結論が補強されることになりそうである。

生前にたった一枚しか絵が売れず貧しい人生を送った画家ゴッホ（1853～1890）や、同じく作品が評価されず非常に貧しいままゴッホと同じく三七歳で世を去った童話作家・詩人宮沢賢治（1896～1933）などを想起するまでもなく、この世界には価値の相対性を証し立てるものとして一般的に認められている無数の証拠がある。価値の相対性を受け入れることは重要である、否、重要であるどころか、受け入れなければならぬという強い信念のようなものを我々は持っているように思われる²。

しかしながら、本当にそうだろうか。価値は相対的だと言い切れるだろうか。というのも、或る時代・或る場所における極めて普通の人たちの「常識」として実行された或る残虐な一連の行為—すなわち、ナチスによるホロコースト³—を、我々は価値の相対性の観点から許容することは到底できそうになりからである⁴。もし本気で価値の相対性を説くなら、強制収容所アウシュヴィッツにおけるできごとをも肯定せねばならない⁵。いかなる価値観にも価値観としての意義を認めるのが相対主義の立場だからである⁶。

相対主義の立場をとる人も、さすがにアウシュヴィッツに対しては「それだけは絶対に許されない」として例外的な扱いをするかもしれないが、「それだけは絶対に許されない」という観点はすでに普遍的・絶対的なものである。「人間としてそれは許されない」などといった言辞で何らかの糾弾を行う時、その糾弾は「すべての人間に例外なく妥当するはずだ」という立場からなされているからである。「例外なく妥当する」とはまさしく普遍的価値・絶対的

価値の存在を前提にした形容にほかならない。アウシュヴィッツにおいて行われた残虐行為にも価値があると表明するのではない限り、相対主義を貫くことはできまい⁷。

この点をどのように考えたらよいだろうか。最初に言っておくと、本稿は価値の相対性を否定しようとするものではない。しかしまた、それを肯定しようとするものでもない。それらのどちらでもなく、価値は相対的だという「常識」が実はそれほど確かではないのではないかとして、この「常識」も疑い得るものなのだということそのこと自体を主題にするものである⁸。今日学生は小中高の教室において「みんなちがって、みんないい」⁹と習い、「個性を大事に」と書かれた横断幕を掲げ、「あなたはあなたらしく」と励まされ、価値の相対性の重視を「常識」とする教育を受けてきている。しかし、いや、それゆえ、この「常識」の先にアウシュヴィッツが存在してしまう可能性があることに教師も生徒もまったく気が付いていないのである。

筆者はつねづねそのような反省のない現状に一石を投げようと考え、この問題意識を筆者が行っている哲学の授業を通して学生と共有しようと試みてきた。本稿はそのような哲学の授業についてのひとつの報告である。

筆者が行う哲学の授業は、哲学に初めて触れる学生に向けた入門用として編まれている。従って、内容的には「哲学とは何か」がまずは最初の大きなテーマになる。そして、この「哲学とは何か」を語る上で、「哲学」という言葉を歴史上はじめて自覚的に使い始めたソクラテス（B.C.470頃～399）がプロタゴラス（B.C.490頃～420頃）やゴルギアス（B.C.483頃～375頃）を代表とするソフィストたちに対抗する立場を表明して歴史に登場してくる経緯はどのような教科書でも必ず触れられているほど重要であって触れないわけにはいかない。とりわけこの歴史的場面においては相対性と普遍性の典型的な対立を見ることができるので、単に哲学史の紹介という観点にとっただけでなく、筆者の問題意識を授業に活かす上でもこの場面に注目する意義は大きい。

そこで、筆者はこれまでこの歴史的場面を単なる哲学史の紹介として座学だけで終わらせてしまわずに、学生たちを巻き込んで価値の相対性と普遍性

について実際に体験的に理解してもらおうと様々な工夫を凝らして授業を行ってきた。本稿ではこのあたりの授業内容を中心に報告することにした。

本稿は実際の授業の進め方に沿わせて、以下のように進めることにしよう。まず、ソフィストの思想を紹介し、その特徴が相対主義にあることを把握する(第一節)。次に、相対主義が正しいかどうかということ、学生たちとともに具体例を用いて検討する(第二節)。続いて、価値の相対性を標榜するソフィストの立場の問題点を明らかにし、その問題点を解決するために哲学史がソクラテスを登場させる経緯を見ていこう(第三節)。しかしソクラテスの立場にも根本的な難点があり、ソフィストを乗り越えることができない。その哲学的な理由を、音楽の動画を用いて学生たちと実践的に検討する(第四節)。このような授業によって、価値の相対性を無批判に受け入れてしまっている態度に痛撃が与えられることを最後に確認したい。なお、本稿の本文は基本的に入門講義の授業内容に即しているため厳密さを欠いているきらいがある。脚注では多少細かい点にも触れているので、適宜参照されたい。

第一節 ソフィストと「相対性」

ソフィストと呼ばれる職業的知識人が登場するのは紀元前五世紀後半頃、いわゆるペルシア戦争後のギリシア世界で民主政治が発展していくその最中である。政治への参加が広く認められ、政治家としての成功を求める青年が増えてくると、そういった青年の要求に対応して彼らを教育する人たちが現れ始めた。この教育者たちは青年に様々な「知」を教授した。彼らがすなわち「知(sophia)を持つ人」であるところの「ソフィスト・知者(sophist)」であった。ペルシアとの本格的な対峙を経て、また各地への通商などが活発になるにつれ、ギリシアはギリシアとは別の価値観の存在に気付き始めたわけだが、ここに道徳の相対性への意識が醸成されることになる。ソフィストたちは実際に旅をして異民族に関する見聞を広め、こういった相対性への意識を強めていたのである。

それ故、道徳は人類すべてに共通する「本性・自然(physis)」に基盤を持

つか、それとも単なる「約束事 (nomos)」なのかという根本的な問題に対しても、ソフィストは道徳を「約束事」として捉え、相対的であると考えたのであった。歴史的にはこの見解に反対する仕方でもソクラテスが登場するのであるが、それは後に回して、いまは相対主義について見ていこう。

さて、ソフィストが登場する前、ギリシアの多神教批判を行っていたクセノパネス (B.C.565?～470?) がすでに次のような言葉を残している。

人間たちは神々が、人間がそうであるように、生まれたものであり、自分たちと同じ着物と声と姿を持っていると思っている。しかしもし牛や馬やライオンが手を持っていたとしたら、あるいは手によって絵をかき、人間たちと同じような作品を作りえたとしたら、馬たちは馬に似た神々の姿を、牛たちは牛に似た神々の姿を描き、それぞれ自分たちの持つ姿と同じようなからだを作ることだろう¹⁰。

ギリシアの神々は人間の姿をしているが、それは人間の信仰対象としての神である限りであって、仮に馬や牛が信仰を持つならその神の形象は馬や牛であるはずだというクセノパネスのこの見解は、神という存在に相対性を読み込む見事な例だろう。クセノパネス自身はこの議論によって、現実に信仰されている多神教的な神々の概念を否定し、普遍的な唯一神の存在を強調しようとしたのであるが、このような立論そのものが時代における相対性への認識の共有を物語っているといえる。

他にも、たとえばこの頃にかかれたと思しき作者不明の著作『両論』においても、民族の違いにおける価値の相対性が非常に多くの事実によって例証されている。目立つ箇所を引いておこう。

テッサリア人にとっては、馬や騾馬を自分で群れからつかまえて馴らすのは立派なことであり、牛を自分で引いてきて屠殺し、皮をはいだり切り分けることもそうだが、シケリアではそれは恥ずべきことであって、奴隷の仕事である。[…]トラキア人にとっては、娘が刺青することは飾

りであるが、他の民族にとっては刺青は犯罪者への罰である。〔…〕マツサゲタイ人は親を切り分けて食べてしまい、子供の中に葬られたことが最も美しい弔いだと思っているが、ギリシアでは、もしだれかがそんなことをしたら、恥ずべき恐ろしいことをしたと思われてギリシアから追放され、不幸な死を迎えるだろう。〔…〕そこで私が思うに、もしだれかがすべての人間に、それぞれが醜いとみなすものを一つところに持って来るように命じ、今度は逆にその集合の中から、それぞれが美しいと考えるものを持ち去るように命ずるなら、一つとして残されるものはなく、すべての人が全体を分けあうことになるだろう。それは、すべての人の認めるものが同じではないからである¹¹。

まったく同一のこと・ものが、一方では美しいとされ、他方では醜いとされるという言明は相対性の強調に外ならない。文化によって価値・道徳は異なるという『両論』で提示されているこの理解は、いわば文化相対主義の骨子そのものである¹²。

こういった相対主義は、初期ソフィストの代表者プロタゴラスの次の言葉によってさらに徹底されたものとして提示されている。

人間はすべてのものの尺度である。あるものについてはそれがあるということの、あらぬものについてはそれがあらぬということの尺度である¹³。

このいわゆる「人間尺度論」の中で言われている「人間」とは、自然や神々に対する種としての人間なのではなく、ひとりひとりの「人間」を意味している。だから、「人間はすべてのものの尺度である」とは「ひとりひとりの人間がすべてのものの尺度である」という意味である。或る絵画が美しいかどうかは、その絵画が見られて初めて云々される事柄であろうが、「見られる」という事態は個々の人間の知覚を通過しない限り不可能であるから、結局のところ、或る絵画が美しいかどうかという問題は、その絵画を見る認識主観

に対して「美しくある・美しく現れている」か、或いは「美しくあらぬ・美しく現れていない」という問題に他ならない。認識する主体を抜きにして事物の価値を決定することは原理的に不可能なのではないか。プロタゴラスはこのように言っているわけである¹⁴。かくして、ここに相対主義は「真理はひとそれぞれ」というひとつの極点に達していると見ることができるだろう¹⁵。

では次に、この相対主義の是非を学生たちと具体例を用いて実際に検討する授業の様子を紹介しよう。

第二節 相対主義の問題点

相対主義の是非を検討する授業では、次のような問いを投げかけることから授業をスタートさせる。

あなたは猫や犬を食べてもいいと思うか？¹⁶

このように問うた後、教室を二分割して、賛成の人は左側に移動してもらい、反対の人は右側に移動してもらおうと、およそ半々に分かれる場合が多い。

ここで、なぜ自分がそのように判断するのかということを一方の立場から語ってもらい、次にその意見への反論を他方の立場から出してもらおう。また、それに対する再反論を出してもらい、まずはこのようにして両者の意見を戦わせてみるのである。ただ、この問いはかなり曖昧な問いであるから、たとえば、「食べるのはよくない」という立場からも、「自分は猫を決して食べようとは思わないけど、猫を食べる文化を否定はしない」といった意見も出されることになる。こうして、徐々に両者の立場に折り合いがつけられていき、異なる文化に対して外側の人間が口出しすることはよくない、という見解で教室全体がいったんは落ち着くことになる。

ここで座席はそのままにして、次のステップへ進む。和歌山県太地町でのイルカ漁に関する或る動画を用い¹⁷、漁によって海がイルカの血で赤く染まるシーンを見せ、そして次のように問う。

あなたはイルカ漁に賛成か？

この動画はイルカ漁を非難する目的から視聴者に衝撃を与えるように作られているので、ここで改めて賛成・反対を問うと、かなりの数の座席移動が行われる。その多くは賛成から反対への移動である。この移動は、猫を食べる文化があってもいいが、このようなイルカ漁は絶対にダメだ、という意見を持つ学生が多いことを表している。双方の意見を戦わせる中で、牛や豚などの屠殺現場との比較や、イルカに対する漁師や地元住民たちの温厚な感謝の気持ち、他の捕鯨国と比べて日本に対する待遇が差別的である事実などについての情報を与えると（或いは、学生たちの側からそのような知識が提示されると）¹⁸、教室は「やはりイルカ漁も猫食と同じ食文化の問題であって、外側から口出しできないのではないか」という見解に落ち着いていく。

このようにして、ここまでは相対主義が正しいことを学生自らが例証しているような状況を作り出すようにしている。しかし、次のステップでこの状況は一変する。ナチスに関する動画をここで用いるのである。色々な素材があるだろうが、筆者は映画『戦場のピアニスト (The Pianist)』を用いている¹⁹。ナチスドイツのポーランド侵攻後が舞台のこの映画では、ポーランド在住のユダヤ人たちが徐々に悲惨な状況へ追い詰められていく様子が描かれている。

映画の前半、ワルシャワ在住のユダヤ人である主人公たちが暮らす集合住宅から道路を挟んだ向かい側に建つ同様の集合住宅にナチスの党員たちが駆け込んで行くシーンがある。上層階の或る部屋にやってきた党員たちは、食事の席につくユダヤ人一家に起立を命じるのであるが、障がいを持った車椅子の老人は立つことができない。その様子を見たナチスの党員たちは老人を車椅子ごと持ち上げて、ベランダから階下の路上へと投げ落とすのである。ナチスにとってユダヤ人は「すべての苦悩の真の元兇である人類の悪質な敵」であり絶滅されるべき存在であるが²⁰、労働力として有益である限り生命は保証される。だから、労働力とならない車椅子の老人はナチスの支配する世界内に居場所はなかったわけである²¹。

相対主義が正しいなら、或る時代の或る場所における或る価値観を外部の人間が取り沙汰できないゆえに、ナチスによる残酷な行為をも「猫を食べるかどうか」と同じく「その文化内の問題」として受け入れるほかない。しかし、そのような態度は可能だろうか。「人間としてそれは絶対に許されない」と考える以外にないのではないだろうか。このシーンを見た学生は、これは明らかに猫やイルカの場合とは異なり文化の違いとして済まされるはずがないという考えで一致する。こうして、相対主義を無批判に受け入れるわけにはいかないことを学生は実感として持つことができるのである。

第三節 ソクラテスの登場

以上のように、相対主義を旨とするソフィストの立場は一見もっともらしいのであるが、少なくとも万能ではないし、突き詰めていくと非常に大きな問題に逢着することがわかるだろう。

さて、ソフィストによると道徳は「自然 (physis)」ではなく「約束事 (nomos)」に基づくのであったが、「約束事」という相対主義の立場は論理的には二つの方向へと進むことになる。第一に、それは懐疑主義である。「価値や真理はひとそれぞれ」であるなら、「絶対に価値のあるもの」など存在し得ないし、「真理らしく思われるもの」しか存在しない。従って、「正しい生き方」「正しい道徳」などといった人間の生を主導する絶対的な指針も存在しない。何が「正しい」のか、誰にも分らないからである。この「分からない」という点に関して、プロタゴラスと同時代のソフィストであるゴルギアスについて伝えられている言葉を掲げておこう。

ゴルギアスは言う。何ものも存在しえない、もし存在するとしても、知ることができない。もし存在し、知ることができるとしても、他の人々に伝えることはできない、と²²。

このような主張の論拠についての詳細はいまは措くとして、ここに徹底的な懐疑主義が現れていることは一目瞭然である。筆者が行っている授業の参

考図書の一つとして紹介している『西洋哲学史』の著者岩崎武雄の言葉を借りると、「プロタゴラスがむしろ一切の認識は真であると考えたのに対して、ゴルギアスは一切の認識を偽であると考えたものと言うことができ」るだろう²³。

さて、相対主義が向かう第二の方向は、暴君の容認である。道徳を「約束事」と見なす相対主義の立場は、「約束事」は所詮「約束事」であって、そのようなものに価値はないのであって、むしろ「自然」に従って生きるべきだという発想を生み出すだろう。プラトン（B.C.427頃～347）の『ゴルギアス』に登場する架空の人物カリクレスがそのような態度を代弁しているので、引用しておこう。

しかしながら、ぼくの思うに、法律〔ノモス〕の制定者というのは、そういう力の弱い者たち、すなわち、世の大多数を占める人間どもなのである。だから彼らは、自分たちのこと、自分たちの利益のことを念頭において、法律を制定しているのであり、またそれにもとづいて賞賛したり、非難したりしているわけだ。つまり彼らは、人間たちの中でもより力の強い人たち、そしてより多く持つ能力のある人たちをおどして、自分たちよりも多く持つことがないようにするために、余計に取るのは醜いことで、不正なことであると言ひ、また不正を行うとは、そのこと、つまり他の人よりも多く持とうと努めることだ、と言っているのだ。というのは、思うに、彼らは、自分たちが劣っているものだから、平等に持ちさえすれば、それで満足するだろうからである²⁴。

カリクレスによると、人間は「自然」を優先すべきなのに「ノモス」を優先してしまっている。しかし、その「ノモス」というのは大勢の弱い人たちが自分たちの利益を優先するために一部の強い人たちを抑え込む目的で制定されたものであって、明らかに「自然」に対して不正である。だから、「自然」の道理に従って、弱者は弱者らしく奴隷的に、強者は強者らしく支配者

的に生きられる世の中こそ「正しい」。動物が生きる自然界と同じく、「力こそ正義」の弱肉強食が理想的だというわけである。

このような態度はまさしく暴君の肯定そのものであろう。権力者は権力者として「自然」の道理を体現している以上、自己の意志は常に「自然」の後ろ盾によって「正しい」ことになる。換言すれば、自分が意志するものは、自分が意志するというそのこと自体によって「正しい」ものとなる。昨日はAを意志したのでAが「正しかった」が、今日は非Aを意志するので非Aが「正しい」。この暴論が「自然」を根拠にして承認される世界では、弱者は強者の恣意に従うしかない。かくして、相対主義は暴君の肯定へとつながることになる。

このように見てみると、相対主義の危険性は明らかであろう。ソクラテスはこの状況に異を唱える。「真らしく思われる価値」に従って生きるなら、相対主義の落とし穴にはまり込んでしまいかねない。だから、これを避けるためには、「絶対に真であるところの価値」・「普遍的な価値」、つまり「いつでもどこでもだれにとってもあてはまる絶対的・普遍的に優れた価値」に従って生きねばならない。かくして、ソクラテスにおいて、このような普遍的・絶対的な「徳」の追究が開始されることになる。「徳」を主題とする『メノン』の中の彼の言葉を見てみよう。「徳は教えられるか」というメノンの問いに対し、それを考える前に「徳とはそもそも何か」ということについて考えなければならないとし、ソクラテスは以下のように述べる。

[男には男の徳、女には女の徳、召使いには召使いの徳、子供には子供の徳、年配の者には年配の者の徳があるというメノンの意見に反論して] ずいぶんばくも運がいいようだね、メノン、徳は一つしかないというつもりでさがしていたのに、徳がまるで蜜蜂のように、わんさと群れをなして君のところにあるのを発見したのだから。[...] たとえその数が多く、いろいろの種類のもがあるとしても、それらの徳はすべて、ある一つの同じ相（本質的特性）をもっているはずであって、それがあからこそ、いずれも徳であるということになるのだ²⁵。

徳にはいろいろなものがあるにしても、それらの徳をまさに徳たらしめている絶対不可欠な本質があるはずであり、それこそが真の徳である、とソクラテスは考える。この真の徳は定義上「あらゆる場合にあてはまるような、何か一つのもの」であるから²⁶、それが何であるかを見出すことができれば、「いつでもどこでもだれにとってもあてはまる徳」の内実が解明されるはずである。

しかしながら、ソクラテス自身はこの取り組みの難しさを理解していた。そういった絶対的・普遍的な徳に関する知識が自分にはないことを彼はほかの誰よりも自覚していたからである。これが彼のいわゆる「無知の知」である。ソクラテスが「無知の知」を表明するシーンは哲学史上最も大事な場面の一つであると思われるので、少し長くなるが紹介しておこう。

ことの発端は、ソクラテスの友人であるカイレポンという人物がデルポイの神殿へ行き、「ソクラテスより賢い人がいるか？」と神の託宣を求めたことにある。そこでカイレポンは巫女から「そのような人はいない」という神の言葉を告げられたのである。この託宣をカイレポンから伝え聞かされたソクラテスは、後にその当時のことを次のように語っている。

いったい何を神は言おうとしているのだろうか。いったい何の謎をかけているのであろうか。なぜなら、わたしは自分が、大にも小にも、知恵のある者なんかではないのだということを自覚しているからです。すると、そのわたしをいちばん知恵があると宣言することによって、いったい何を神は言おうとしているのだろうか。というのは、まさか嘘をいうはずはないからだ。[...]そしてやつのことで、その意味を、何か次のような仕方、たずねてみることにしたのです。それは誰か、知恵があると思われる者のうちの一人を訪ねることだったのです。ほかはとにかく、そこへ行けば、神託を反駁して、ほら、この者のほうが、わたしよりも知恵があるのです、それだのにあなたはわたしを、知者だといわれた、というふうに、託宣にむかってはっきり言うことができるだろうというわけなのです。[...] その人物を相手に、これと問答をしな

がら、観察しているうちに、アテナイ人諸君、何か次のようなことを経験したのです。つまりこの人は、他の多くの人たちに、知恵のある人物だと思われているらしく、また特に自分自身でも、そう思いこんでいるらしいけれども、じつはそうではないのだと、わたしには思われるようになったのです。[…] わたしは、自分ひとりになった時、こう考えたのです。この人間より、わたしは知恵がある。なぜなら、この男もわたしも、おそらく善美のことがらは、何も知らないらしいけれども、この男は、知らないのに、何か知っているように思っているが、わたしは、知らないから、そのとおりにまた知らないと思っている。だから、つまりこのちょっとしたことで、わたしのほうが知恵のあることになるらしい。つまりわたしは、知らないことは知らないと思う、ただそれだけのことで、まさっているらしいのです²⁷。

このようにして「無知の知」を表明するに至ったソクラテスは、それ故、自分は「知 (sophia)」を持つ「ソフィスト」ではなく、「知」を「愛し求める (philo)」ところの「フィロソファー (哲学者)」であるとして、ここに「フィロソフィー (哲学)」という概念が彼によって自覚的に用いられるようになったのである。

さて、目下ソクラテスは絶対的・普遍的な価値に関する「知」を持っておらず、それを探し求める途上にある。彼はそれをやがて見つけることになるのだろうか。この点を次に検討しよう。

第四節 全員が感動する歌を探す

ソクラテスはソフィストとは正反対に、人間は絶対的・普遍的に善い道徳に従って生きなければならないと考えたといえるが、そもそもそのような道徳は存在するのだろうか。ソクラテスが求めたものは要するに、「いつでもどこでもだれにとってもあてはまる絶対的・普遍的に優れた価値」とはどのようなものかということに対する回答である。

しかし、そのような価値を探し当てる作業が至難の業であることは想像に

難くない。我々の経験に引き付けてみれば、こういった普遍性・絶対性を実現することがどれほど困難か、誰にでも理解できるはずである。序で述べたように、自分を感動させた曲が同じように他人をも感動させるかどうかは不確かである。自分にとって感動的ならば他人にとっても同じく感動的であるはずだと断言することは、ソクラテスに非難されるであろう暴君の態度に他ならないだろう。

しかしながら、そのような名曲が実際に存在するかもしれない可能性を完全に否定してしまうこともやはりできないはずである。というのも、「地球上のすべての人間」のひとりひとりが、「地球上に存在するすべての曲」のひとつひとつを聴いて、全員一致で「感動的だ」と判断する曲があるかどうかを確かめたことは歴史上一度もないからである。確かにいままでそのような名曲は存在しなかったかもしれないが、それはそういった普遍の名曲が原理的に存在し得ないからでは決してなく、経験的に確認されてこなかっただけだからとも言える可能性が残っているからである。この点がとりわけ重要であろう。ソクラテスの探求の成否は、要するに、この僅かな可能性にかかっていると見てよい。

それ故、我々もソクラテスの精神に倣って、僅かな可能性に賭けてそういった普遍の名曲を探してみよう。これが筆者の授業で行われる取り組みである。受講者に「自分が感動した曲」を教室内で紹介してもらい、全員で聴き、そして「感動したかどうか」を採決してみるのである。これは90分の授業一回分の中で行われる取り組みであるから、受講者全員にプレゼンテーションをしてもらう時間はない。この取り組みを始めた昨年度（2019年度）の秋学期では、筆者が最初に見本となってその一連の作業を行い、その後、事前に申し出があり準備をしてもらっていた四名の学生に登壇してもらった。内容はざっと以下の通りである²⁸。

- ① アメリカのハードロック（本稿の序で記したBON JOVIの「Always」）
- ② 日本のポップス（King Gnu ※曲は不明）
- ③ オペラ（中国の若手歌手 ※歌手名と曲名は不明）

- ④ アメリカのポップス（有名歌手が大勢で歌う「We are the world」）
- ⑤ アメリカ国歌（バスケットの試合前における少女の歌唱）

それぞれの曲を聴き終わる度に、出席者101名にアンケートをとり、「感動したかどうか」を○か✕で評価してもらった。選択肢に△を設けず、○と✕の二つだけにしたのは、普遍性を探す作業にとっては全員の○を引き出すことが目指されており、△は○ではない以上、✕と同じだからである。

さて、①と②は約80票、③・④・⑤は約95票を集めたが、満場一致の「感動」は得られなかった²⁹。登壇者の全員が自信を持って「受講者全員が感動するはず」と思って曲を紹介したわけだが、たとえ95票を集めたとしても、完全な満票でない以上は普遍性に辿り着いていない。普遍性に辿り着いていないという意味では、出席者101名の内の100票を集める曲でも1票しか集めない曲でもその身分は同じである。

以上のような実験を通して、受講生はソクラテスの目指すものの難しさを理解する。本稿ではとりわけ、この時の彼らの理解の仕方が、頭だけで行われるものではなく体を使って実践的に行われるものであるという点を強調しておきたい。哲学的思索を行うために哲学史の知識は不要だと考える論者もいるが、以上のような筆者の授業においては、哲学史の教授も哲学的思索の実践も、ともに行うことができるというメリットがある。

さて、ともかく、普遍性を探す我々の作業はこうして頓挫してしまった。ソクラテスもまたこの可能性をすでに見据えている。

実際はおそらく、諸君よ、神だけが本当の知者なのかもしれない。そして人間の知恵というようなものは、何かもうまるで価値のないものなのだ³⁰。

普遍的な道徳を導く「知」を持つ「知者」になることをソクラテスは目指していたわけだが、それは不可能なのかもしれないという心情が素朴に吐露されている。ソフィストの立場から帰結する問題は必ず解決しなければなら

ない。さもなければ、人間の生を導く指針は揺らいだままであり、真に「よく生きる」ことは不可能になる。ソクラテスはこう言う。

大切にしなければならないのは、ただ生きるということではなくて、よく生きるということなのだ³¹。

「よく生きる」ためにはどうしても普遍性にかなう「知」がなければならぬ。しかし、経験的な仕方でのような「知」を見出すことは不可能である。それは原理的には可能かもしれないが、制限された人間の実生活においては見出すことは不可能である。こうして、ソフィストに抵抗したソクラテスの試みも、実際には挫折してしまったのである。メノンを相手になされた徳そのものの内実の探求は以下のように終えられている。

徳というものは、もし徳が誰かにそなわるとすれば、それは明らかに神の恵みによってそなわるのだということになる。しかしながら、これについてほんとうに確かな事柄は、いかにして徳が人間にそなわるようになるかということよりも先に、徳それ自体はそもそも何であるかという問を手がけてこそ、はじめてわれわれは知ることができるだろう。だが、いまはもう、そろそろぼくは行かなければならない³²。

ソクラテスは「徳は教えられるか」というメノンの問いに答える前に、「徳とはそもそも何か」と問うたわけであったが、結局その問いにも答えることができなかつたのである³³。

おわりに

ソクラテスは失敗した。しかし、だからといって、それがソフィストの成功を意味するわけでは決してない。この点を最後に確認しておきたい。

「価値はひとそれぞれ」「文化によって道徳は異なる」といった相対主義を「常識」とする態度は、一定の範囲内で有効である。それは筆者の授業で実

際に学生たちと検討してみるとよくわかることでもある。しかしまた他方では、この一定の範囲とは一体何なのか、どこまでがその範囲なのか、その線引きの根拠が決して明らかではないにもかかわらず、「それだけは許されない」といった領域が確かに存在していることもまた明らかであるように思われるのである。その領域を定義づけること、つまり、何らかの具体的な形を持つものとして提示することは、「聴く人すべてを感動させる歌」を探すのが現実的には不可能であるのと同じく不可能である³⁴。しかし、確かにその領域はあるといえるのではないか。このような希望を持つことは許されるはずである。我々の実験では5曲のうち3曲が95票を集めたのであるから、もっと時間をかけて調べることができれば満票を集める曲があるかもしれない、或いはそういう曲をいずれ誰かが作るかもしれないと期待することが許されるのと同じである³⁵。

多様性、個性、異文化、他者、「みんなちがって、みんないい」、「あなたはあなたらしく」、「ありのままがいい」、「がんばらなくていい」といった現代のキーワードはすべて相対主義を前提にしている。しかし、いまやその前提を無批判に受け入れることはできない。無批判に受け入れる態度がアイシュヴィッツを生み出すかもしれない。だから、「常識」を疑え！これが筆者の授業の答えである。

さて、本稿の序で語られたBON JOVIの例のライブバージョンの「Always」であるが、授業では受講者約100名のうちの約八割の賛同を得たものの、残り二割の受講者の心を動かすことはなかった。この事実に対し、ここまでは「この曲は普遍性を持っていない」と理解してきたわけであるが、実はこれとは別の理解の仕方がある。すなわち、「残り二割の人たちは、この曲のよさに気が付いていないだけなのだ」という理解を行うわけである。この曲自体には普遍性が内在しているのに、聴く側がその事実には気が付いていない。だから、問題はむしろ曲の内容ではなく聴く側の人間にあって、それ故教育が重要なのだ。およそこのような方向へと議論を進めていくことも可能だろう。このような考えの先に、ソクラテスの高弟プラトンのイデア論がある。筆者の授業はこのような筋書きでプラトン哲学へと進むことになるが、その報告は別

稿に委ねたい。

注

- ¹ 凡例:引用文中における引用者の補足は〔 〕で表し、〔…〕は引用者による省略を表す。()は引用元からそのまま拾ったものである。また、読者の参照の便宜を考え、日本語以外の言語で書かれたテキストに関してはすべて邦訳を用いた。
- ² おそらく、現代においては「多様性」という観点を蔑ろにする人は非道徳的だというレッテルを張られるのではないかとさえ思われる。
- ³ ホロコーストにおいて中心的な仕事をしたアイヒマンは、悪の権化たる「怪物」でもなければ狂信的な反ユダヤ主義者でもなく、どこにでもいる平凡な市民であったとアーレントは言う(ハンナ・アーレント『イエルサレムのアイヒマン—悪の陳腐さについての報告』大久保和郎訳、みすず書房、1969年(原典は1963年)、20頁、42頁、221頁参照)。この点で、「悪をおこなう意図が犯罪の遂行には必要であるという、近代の法体系に共通する仮説」は問い直されるべきだといえる(同書、213頁参照)。分別を備えた常識人が「悪を行う意図を持たずに」、「常識の範囲内で」、恐るべき大虐殺を結果させてしまったからである。
- ⁴ ナチスの時代を生きたドイツの法哲学者ラートブルフは「相対主義は〔…〕もろもろの価値判断のすべてをしかもそれらのおおのを、それらがその主張者にとっては排他的な義務的性格を有するがゆえに、同等の権利を有するものと認める」と述べ、「それ〔=相対主義〕は窮極の立場の科学的基礎づけの断念」を意味するとして、相対主義の立場をとった(ラートブルフ『ラートブルフ著作集 第一巻 法哲学』田中耕太郎訳、東京大学出版会、1961年(原典は1955年)、119頁～120頁)。しかし彼自身はナチスを批判したので、ナチスに対しては「同等の権利」を認めなかったといえる(それ故ラートブルフは公職から追放されている)。この事実に基づいて彼の相対主義哲学は破綻していると断じる議論を展開することは、相対主義は自分の立場を「絶対に正しい」とする時点で破綻しているとするメタレベルの反論と同じく、あまり有益ではないように思う。ラートブルフを紹介する原秀男はまさしくこの件に関して「このことによって彼が自ら相対主義を否定したと断ずることはできない」としている(原秀男『価値相対主義法哲学の研究』勁草書房、1968年、10頁)。もっとも、いまはこれ以上の議論は措くことにする。
- ⁵ ジェームズ・レイチェルズ『現代をみつめる道徳哲学—安楽死からフェミニズムまで—』古牧徳生・次田憲和訳、晃洋書房、2003年(原典は1986年)、25頁参照。
- ⁶ ポパーは「〔相対主義の〕態度は、あらゆるテーゼは知的には多かれ少なかれ同等に主張可能であるというテーゼを導きます。すべてが許されるのです。ですから相対主義のテーゼは、明らかにアナーキー、法の喪失状態、そして暴力の支配を導くのです。〔…〕相対主義とは、何でも主張できる、ほとんど何でも、したがって何も主張しないという立場です。すべては真であるか無であるかなのです。ですから真理は意味を持ちません」と述べている(カール・R・ポパー『よりよき世界を求めて』小河原誠・蔭山泰之訳、未來社、1995年(原典は1984年)、301頁～302頁)。もっとも、ファイヤアーベントはポパーのこの文言を「相対主義に対する呪詛」だとし、ポパーを理論優先型の独断的立場

であるとして批判する（パウル・ファイヤーアーク『理性よ、さらば』植木哲也訳、法政大学出版局、1992年（原典は1987年）、89頁参照）。相対主義そのものの検討作業は本稿の能くするところではないが、現代においても相対主義に対する反相対主義の立場があるし、さらにギアツのように自らを相対主義者ではないとしつつも「反=反相対主義」掲げる論者もいる（クリフォード・ギアツ『解釈人類学と反=反相対主義』小泉潤二訳、みすず書房、2002年、59頁以下参照）。

⁷ 文化相対主義の代表的論客であるベネディクトは「もっとも異常にみえる状況も、その社会自体の尺度にあわせて動いているのである」と述べている（R・ベネディクト『文化の型』米山俊直訳、社会思想社、1973年（原典は1934年）、81頁）。

⁸ 要するに脚注6で触れたような、相反する立場が相対主義を巡って論戦を繰り返しているという事実が存在すること自体が、相対主義を信じ込んでいる学生にとっては驚愕なのである。

⁹ この文言は、金子みすゞの「私と小鳥と鈴と」という詩の中にある言葉である（与田準一・まどみちお・清水たみ子・武鹿悦子・矢崎節夫編『新装版 金子みすゞ全集』第三巻、JULA出版局、1984年、145頁）。筆者のみるところでは、問題は、教育者たちがこの文言を「事実と価値の区別」という観点の存在に気付かぬまま乱用している点にある。これに関してもいざ論じてみたい。

¹⁰ 内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集』第I分冊、岩波書店、2008年、273頁～274頁。

¹¹ 同、第V分冊、242頁～243頁。

¹² 『文化人類学事典』によると、文化相対主義とは「いかなる風習も、それらを一部分として包摂する文化全体という観点から把握されなければならないとする人類学者の態度ないし研究方法」のことであり、「どの文化もそれぞれ所与の環境への最適の適応方法として歴史的に形成されたものであり、すべての文化がそれなりの価値を内在しているという捉え方をする」ものである（江淵一公「文化相対主義」項目、石川栄吉・梅棹忠夫・大林良太・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男編『文化人類学事典』弘文堂、1987年、671頁参照）。本稿の注7も参照。ただし、文化相対主義についてのこういった理解のほかにも、たとえば「文化相対主義とは他者に対して、自己とは異なった存在であることを容認し、自分たちの価値や見解（=自文化）において問われていないことがらを問い直し、他者に対する理解と対話をめざす倫理的態度のことをいう」と定義する池田光穂のような論者もあり（池田光穂「文化相対主義」<https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/000316crelat.html>（閲覧日：2020年6月20日））、文化相対主義を「価値や道徳は文化によって様々だ」というだけの態度として単純に理解すべきではない点には十分な注意が必要である。

¹³ 内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集』第V分冊、28頁。

¹⁴ いまは論旨の明快さを優先して省略するが、価値以外の観点、つまり「事実」についても、プロタゴラスの相対主義は貫かれている。たとえば、目の前に置かれたコップが白色かどうかという「事実」も、その人にとってそのコップが「白色である」ものとして現れている限りで初めて「白色」であるわけであり、個々人の知覚と切り離してコップそのものの色を詮索することは無意味であると考えられることのできるからである。

¹⁵ もっとも、「人間尺度論」に対するこのような理解、つまり「人間というのは君や僕のこ

- とである」とする理解は、プラトンによる解釈に依拠するものであるが（『テアイテトス』田中美知太郎訳（田中美知太郎・藤沢令夫編『プラトン全集』第二巻所収）岩波書店、1974年、208頁参照）、たとえばヘーゲルは「これはまちがった、さかだちした理解のしかた」だとして、この命題における「人間」を「個々人」ではなく「主観一般」であるとする（ヘーゲル『哲学史講義』上巻、長谷川宏訳、河出書房新社、1992年、360頁～361頁参照）。また他にも、「人間尺度論」を相対主義としない解釈もある（中澤務「プロタゴラスの人間尺度説：その歴史の実像をめぐる」『關西大學文學論集』第66巻、第4号、2017年参照）。
- ¹⁶ すぐ後で述べるが、この問いは意図的にかなり曖昧に設定してある。受講生の自覚的な思考を促すためである。
- ¹⁷ ルイ・シホヨス監督『ザ・コーヴ（The Cove）』ポニーキャニオン、2009年（DVD）。
- ¹⁸ 『The Cove』から6年後、これを反証する意図で制作されたドキュメンタリー映画『Behind “THE COVE”～捕鯨問題の謎に迫る～』が公開された。授業の進度によってはこの映画を用いることもかなり有効だと思われる。
- ¹⁹ ロマン・ポランスキー監督『戦場のピアニスト（The Pianist）』エイドリアン・プロディ主演、アミューズピクチャーズ株式会社、2002年（DVD）。
- ²⁰ アドルフ・ヒトラー『わが闘争』下巻、平野一郎・将積茂訳、角川書店、2001年（原典は1926年）、339頁。
- ²¹ 実のところ、ナチス内部でもユダヤ人絶滅を主張する国家保安本部とユダヤ人を生かして労働力として利用したい経済管理本部では意見が一致していなかったらしい（柴壽雅子「アドルフ・アイヒマンの罪」『大阪国際大学紀要 国際研究論叢』19巻1号、2005年、116頁参照）。
- ²² 『メリッソス、クセノパネス、ゴルギアスについて』福島保夫訳（山本光雄編『アリストテレス全集』第十巻所収）岩波書店、1969年、243頁。
- ²³ 岩崎武雄『西洋哲学史（再訂版）』有斐閣、1975年、33頁～34頁。
- ²⁴ 『ゴルギアス』加来彰俊訳（田中美知太郎・藤沢令夫編『プラトン全集』第九巻所収）岩波書店、1974年、114頁。
- ²⁵ 『メノン』藤沢令夫訳（田中美知太郎・藤沢令夫編『プラトン全集』第九巻所収）岩波書店、1974年、251頁～253頁。
- ²⁶ 同書、255頁。
- ²⁷ 『ソクラテスの弁明』田中美知太郎訳（田中美知太郎・藤沢令夫編『プラトン全集』第一巻所収）岩波書店、1975年、61頁～62頁。
- ²⁸ 残念ながら、詳細を記した紙を紛失してしまったため、情報提供に制限がある。しかし、そのことはこの作業の本質にはまったく関わらないことを付言しておく。
- ²⁹ 何をもち「感動した」とするかということは主観的な基準に基づくものであるだろうから、授業では「いい歌だと思った」というような漠然としたプラス評価も「感動した」に含めるとした。もっとも、「いい歌」の「いい」ということにも同じ主観性の問題が伏在しており、問いの設定に関しては改善の余地があるだろう。今後の課題である。
- ³⁰ 『ソクラテスの弁明』田中美知太郎訳、65頁～66頁。
- ³¹ 『クリトン』田中美知太郎訳（田中美知太郎・藤沢令夫編『プラトン全集』第一巻所収）

岩波書店、1975年、133頁。

³²『メノン』藤沢令夫訳、332頁。

³³メノンの問いに対しては、「徳は神の恵みによって人間にそなわるのであって、教えられうるようなものではない」と答えたといえる。

³⁴「人権」という一見普遍的に思われる概念を持ち出してみても、問題は横滑りするだけである。というのも、「人権」という概念がカバーする範囲を区切る境界線の線引きはかなり曖昧だからである。だから、「人権」という概念を掲げて普遍主義を「常識」とする立場も、「個性重視」や「豊かな多様性」という標語を掲げて相対主義を「常識」とする立場と同じように、反省される必要があるはずである。

³⁵この態度を客観的真理への接近を目指すものとして把握すれば、「理論の数が多ければ多いほど、理論はよりよくなる」として多様性に真理探究の可能性を見出すポパーの批判的多元主義と同じあるといえるかもしれない（カール・ポパー、前掲書、302頁・321頁参照）。本稿の議論も多様性そのものを否定するわけではなく、むしろ多様性の重要性を明確に認識した上に成立している点を強調しておきたい。